

ジャパニーズ・カルチャー としてのヴィジュアル系 —変容し続ける世界—

外国語学部
英語英文学科3年

長瀬 絢香

皆さんは、「ヴィジュアル系」と聞くとどのようなイメージを持たれるだろうか。やはり先ず浮かんでくるのはX JAPANであろうか。そこに端を発する「ヴィジュアル系」と呼ばれる音楽ジャンルは、それなりに古い歴史を持つものの、最近になってシドやゴールデンボンバーなどの存在によって一般的にも身近なものとなり、認められてきている。今まで否定されてきたわけではないが、ここでは抵抗なく受け入れられるようになったという意味で、「認められる」という言葉を使いたい。

そもそも、ヴィジュアル系とは何であるのか。ウィキペディアによると「過激で派手な化粧や髪型、衣装などの外見が最大の特徴。装飾美バンドを主としてカテゴライズされたもので、それらの影響を強く受けた後の世代のバンドをも指す。」

とある。しかし、現在私たちが目にしやすいヴィジュアル系と呼ばれる人々は、その定義にはあまり納まっていないように思われる。派手というよりは中性的な顔立ちと化粧、ポップなコンセプト。それは、そのバンドたちが、元祖となるX JAPANなどのヴィジュアル系から派生した形態、「ネオ・ヴィジュアル系」と呼ばれる人々とその後続だからである。

2006年6月のオリコンスタイルにおいて、ネオ・ヴィジュアル系とは「ルックスの良さがまず先にあって、ある意味でアイドル的な盛り上がり方に似ている。」とされた。代表的な名前として、The Gazetteやシド、ナイトメアなどが挙げられる。ネオ・ヴィジュアル系以降のアーティストには、ファッショナブルな化粧や衣装が多く見

受けられ、それが一般受けし易くなった理由ともとれる。

現在もなお、ヴィジュアル系というジャンルは様々な変容をとげ、世間に広く注目されるようなバンドも再び出て来始めている。

今回取り上げたいバンドに共通しているものは、外見の美しさ。"ヴィジュアル"を基盤としながら、さらに今までに無かった要素。"笑い"と"音楽"の融合である。

まずは、ネオ期に結成、登場したJelky。彼らは、ドラマ以外のメンバー全員が吉本興業の芸人であるという特殊なバックグラウンドを持つ。メンバーはロンドンブーツ1号2号の田村淳。メンバーそれぞれが本名とは異なる名前をもち、田村淳は、

出っ歯であることから *hadernu* (ハデル) という名前前でバンド活動をしている。その他のメンバーも、実家が団地のため *dunch* (ダンチ) や親からももらった名前を変えたくないという本人の意向によりそのまま *hicki* (ヒデキ) など、一見コミックバンドと見られがちである。ヴィジュアル系のファンの間でも、彼らを肯定的に思わない人が存在する。しかし、彼らの音楽・ライブは真剣そのものであり、お笑いのファンとヴィジュアル系のファンの橋渡しの役割を担っている。特にライブでは、彼らの本業である笑いが存分に活かされ、MCも飽きることなく、終始笑顔に包まれている。ムックや *Acid Black Cherry* など有名なヴィジュアル系アーティストが楽曲提供やレコーディングヘゲスト参加するなど、彼らの音楽がアーティスト側から認められていることは肯定すべきだろう。特有のバックグラウンドから、テレビ等への露出も一時期見られた。これは、お笑いという広く一般的な世界の間人がヴィジュアル系の世界に踏み込んだことよって、それを見た人々へ少なからずヴィジュアル系への入り口を広げたと言える。

昨年末から今年にかけて一気に活躍したゴールデンボンバーは、新しさの最たるものである。彼

らは、ヴィジュアル系界だけでなく、日本の音楽全体に新しい風を吹き込んだ。彼らの最大の特徴は、「エアーバンド」という特殊なスタイル。中性的な顔立ちや化粧、形態もバンドとは名乗っていないものの、作詞作曲を手がけるボーカルの鬼龍院翔(きりゅういん しょう) 以外は誰も楽曲製作に携わらない。なぜなら、楽器が弾けないからだ。それでも、楽器が弾けない代わりに踊ったり、ギターソロではスイカの早食いやソーセージを繋げて縄跳びをするなど、彼らは「笑い」を融合させた特異なライブと、「女々しくて」「また君に番号を聞けなかった」「元カレ殺ス」などといったタイトルとは想像もつかないハイクオリティな楽曲により、爆発的な人気を得た。

今やヴィジュアル系は、国外においても、アニメと同様にその単語だけで意味が通じるようなジャパニーズ・カルチャーとして認知されている。留学生インタビューに答えて下さったサラさんも、ヴィジュアル系の音楽について話している。(詳しくは留学生インタビューのページを参照) ムックやギルガメッシュなど、海外でライブを行なうアーティストが増え、最近では *VIVID* が台湾とシンガポールでライブを行った。先ほど挙げた *jaalko* とゴールデンボンバーも類に漏れない。

海外での人気には、アニメの影響もあると考えられる。ヴィジュアル系だけの音楽フェス *V-ROCK FESTIVAL* の主催者の杉本圭司氏は、「国籍も性別も分らない華奢で美しい主人公がヒーローとして活躍することが多いアニメ、その実写版のような見方をする海外のファンも多いようです。欧米人はどんなに真似ようとしても体つきで似合わないんですよ。日本人の華奢な体型がアニメっぽい。これまでデメリットだと思われていたものがメリットになった、クールになった。初めて堂々と世界にマーケットを広げていけるものです。」とオリコンオンラインで語っている。ジャパニメーションという言葉が存在する今、それと共に、ヴィジュアル系は世界に発信できる立派な日本の文化なのである。アニメとヴィジュアル系の共同戦線なのか、ヴィジュアル系アーティストの楽曲がアニメのタイアップになることは多い。

最近では、日本国内でも対応が変わってきている。音楽業界とヴィジュアル系双方の変化の結果かもしれないが、*SUMMER SONIC* や *ROCK in JAPAN FESTIVAL* など、巨大音楽フェスへの参加が見受けられるようになって

たからだ。X JAPANの参加はもちろん、The Gazetteとムックは、SUMMER SONICに出演し、Plastic tree、雅—MIYAVI—、そしてまたムックは、ROCK in JAPAN FESTIVALに出演した。

様々な変容を繰り返し、進化し続けるヴィジュアル系という一つの文化。その文化は非常に奥深く、独特であり、ここで全てを語りつくすことは出来ない。筆者もまた、それを理解しようとしている最中であり、それは永遠に突き詰められるものではないからだ。この日本独自の文化は、世界に認められているにも関わらず、なぜ当の我々日本人が知らないのか。それは、ヴィジュアル系の変遷の中で唯一普遍的な、ファンとアーティストの密な繋がりが醸し出す、独特な閉鎖的空気感のせいかもしれない。しかし、ひとたびその扉を開ければ、様々なエンターテイメントが待っている。その扉を開くには、勇気も覚悟も必要無い。良くも悪くも、音楽の異端な世界への好奇心さえあれば良いのだ。好奇心に従って、ヴィジュアル系というエンターテイメントに触れ、世界に誇るジャパニーズカルチャーを自分の肌で感じるべきだと、筆者は強く提案する。

参考

● ウィキペディア

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%82%A2%E3%83%AB%E7%B3%BB%E3%83%8D%E3%82%AA%E3%83%BB%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%82%A2%E3%83%AB%E7%B3%BB%E3%81%AE%E6%B5%81%E8%A1%8C>

● オリコンビズオンライン

<http://biz-m.oricon.co.jp/news/data/174.shtml>

● 『VISUAL ROCK ライブ参戦完全マニュアル』

辰巳出版、「ヴィジュアル系ヒストリー」のページより引用。